

妻道南遺跡  
TUMA MITI MINAMI

発掘調査報告書

1986.3

高鍋町教育委員会

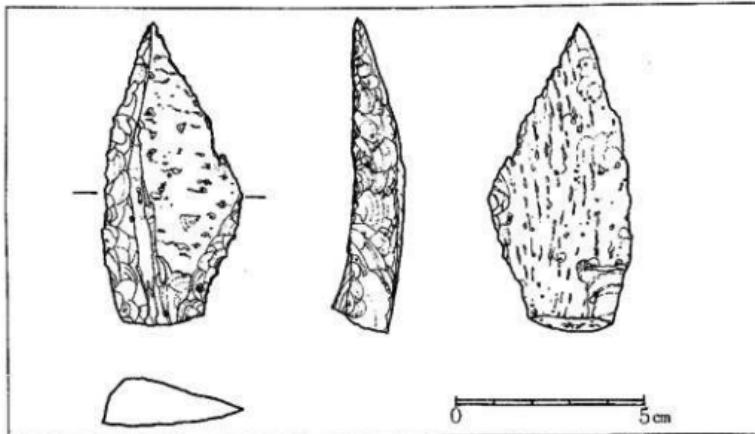
## 正 誤 表

### 【訂 正】

P13~14 9図 A区4号集石実測図 (1/40)

断面図 Level 72.90m

P20 13図 A区出土 ナイフ形石器実測図 (2/3)



妻道南遺跡  
TUMA MITI MINAMI

発掘調査報告書



1986.3

高鍋町教育委員会

## 序

このたび、妻道南遺跡発掘調査報告書を刊行することになりました。

高鍋町教育委員会では、県営農村基盤総合整備パイロット事業（尾鈴二期地区・上永谷工区）におけるは場整備事業に伴い、既当地域に所在する妻道南遺跡の発掘調査を実施しました。

本調査では、期待された旧石器時代の石器をはじめとして、縄文時代の集石遺構や土器・石器類が出土し、多大な成果をあげることができました。発掘で得られた成果は、ふるさとの歴史の一端を窺わせるものであり、私達の貴重な文化的財産のひとつとなりました。この報告書が、学術資料として、また社会・学校教育の場で広く活用され、我が町にたいする歴史的関心と知識が深まることを願ってやみません。

尚、発掘調査に際しては、宮崎県一ヶ瀬土地改良事務所・宮崎県教育庁文化課等、各関係機関をはじめ地元町民の皆様の積極的な御協力をいたきました。心より御礼を申し上げ、刊行の言葉といたします。

昭和61年3月

高鍋町教育委員会

教育長 岩 永 高 德

## 本文目次

第1章 はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の立地と環境	1
3. 発掘調査の概要	3
4. 異序	7
第2章 造構と遺物	9
A区	B区
1. 遺構	1. 遺構
(1) 集石遺構	(1) 集石遺構
(2) 土壙	(2) その他の遺構
2. 遺物	2. 遺物
(1) 縄文時代の遺物	(1) 石器
④ 石器	(2) 繩文土器
⑤ 土器	(3) 須恵器
(2) 旧石器	(4) 陶磁器
第3章 まとめ	31

## 挿図目次

第1図	妻道南遺跡位置図	2
第2図	妻道南遺跡 A 区発掘区・遺構分布図	4
第3図	妻道南遺跡 B 区発掘区・遺構分布図	6
第4図	妻道南遺跡上層断面図・土層柱状図	8
第5図	A区 1号集石実測図	10
第6図	A区 2号集石実測図	11
第7図	A区 3号集石実測図	11
第8図	A区 5号集石実測図	12
第9図	A区 4号集石実測図	13~14
第10図	A区 土壙実測図	17
第11図	A区出土石礫・上器実測図	18
第12図	A区出土石器実測図	19
第13図	A区出土ナイフ形石器実測図	20
第14図	A区出土旧石器実測図 1	21
第15図	A区出土旧石器実測図 2	22
第16図	A区出土旧石器実測図 3	24
第17図	A区旧石器分布図	25
第18図	B区 1号集石実測図	26
第19図	楕円押型土器実測図	27
第20図	B区出土石礫実測図	28
第21図	B区溝状造構実測図	29
第22図	陶磁器実測図	30

## 例　　言

1. 本報告書は県営農村基盤総合整備パイロット事業（尾鈴二期地区・上永谷工区）による、ほ場整備工事に伴って、高鍋町教育委員会が実施した妻道南（つまみちみなみ）遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、昭和60年10月28日から昭和61年1月18日に至る期間実施した。
3. 調査関係者は次のとおりである。

調査主体　　高鍋町教育委員会  
教育長　　岩永高徳  
社会教育課長　松井克興  
同課長補佐　井上文秀（文化財担当）  
庶務係　木須美美子（庶務担当）  
調査員　近藤　　協（県教育庁文化課主事）

### 発掘作業に携わった方々

清　和巳、清　アサ子、松　本　ヌイ子、矢　野　アヤ子、  
宇治橋　ユリ子、永　友　たづ子、宇治橋　マツ子、三　輪　佐智子、  
春　成　ツ　ネ、江　藤　節　子、吉　田　さおり、岡　本　ツ　ワ、  
藤　本　尚　忠、池　田　晴　美、黒　木　ツ　ヤ、中　武　規　子、  
松　井　扶美子、高　橋　タツエ、河　野　ツネ子

4. 調査に際しては、県農業試験場の有村玄洋氏に土壤分析を依頼し、旧石器については、別府大学の橋昌信氏に御教示いただいた。
5. 本報告では、集石遺構についてSIの略記号を用いた。
6. 遺物の実測・トレース・図面の作成は主に近藤があたったが、一部については野村涼子氏、荒木慶子氏の協力を得た。
7. 本書の執筆・編集は近藤が担当した。
8. 出土遺物は高鍋町教育委員会に保管されている。

# 第1章　はじめに

## 1. 調査に至る経緯

高鍋町南高鍋に所在する上永谷地区は、昭和60年度中に県児湯農林振興局が実施する圃場整備事業の対象地区となっていた。既当地区の台地南端部は、この台地を開拓する湧水があって、附近には幾つかの溜池がみられるなど、地形的にみて遺跡が立地するに最適な自然環境にあると判断した。そこで高鍋町教育委員会は昭和59年11月8日・9日の2日間にわたり、県教委文化課の協力を得て遺跡確認調査を実施した。

調査の結果、A地区では第1トレントにおいて集石遺構の一部とみられる焼跡群を、第3トレントで焼跡の散在をみとめ、その焼跡の出土する土層から判断して縄文早期の遺跡であることが推定された。農作物が作付されていたB地区では、そのために充分なトレントを設定することができなかったが、北西端に設けたトレントにおいて、アカホヤ面から掘り込まれた直徑60cmほどのピット、上師器片の出土をみて、この地区においては掘立柱建物跡等の遺構が検出されるものと判断された。試掘調査の結果をうけて、本調査を昭和60年10月28日より、翌昭和61年1月末日までの予定で実施することとなった。

## 2. 遺跡の立地と環境

妻道南遺跡は高鍋町の南端、新富町との町境付近にあって新富町から高鍋町に向って北西にはば直線にはしる国道10号線の西、標高75mの台地上に位置する。

この台地は小丸川と一ツ瀬川間の宮崎平野北部段丘群の1つを形成する新田原面（V面）に相当し、台地東端は海岸段丘となって国道面との比高差は64mある。遺跡の南側は途々に傾斜して谷となり、小河川によって開拓されている。妻道南遺跡の下の台地、すなわち上永谷集落には県指定古墳（高鍋町古墳）が6基余りみられ、またその下の面には国道に面する侵蝕崖にシルト質の第3紀層に営まれた横穴式古墳三基（下永谷横穴群）がある。

その他、小丸川の右岸には宮出川を眺む小丘陵の裾に営まれた光音寺横穴群<sup>注1</sup>、中世の掘立柱跡、上師器の出土をみた南中原遺跡、牛牧遺跡がある。そして小丸川左岸域には、標高30~50mの比較的狭い丘陵上に前方後円墳、円墳あわせて85基余りで構成されている国指定史跡持田古墳群を見る。<sup>注2</sup>



1. 妻道南遺跡  
 2. 下永谷横穴群  
 3. 牛牧遺跡  
 4. 新山(旧石器出土)  
 5. 持田古墳群  
 6. 持田中尾遺跡  
 7. 上別府遺跡  
 8. 水谷原古墳群  
 9. 雲雀山古墳  
 10. 毛作古墳群  
 11. 上永谷古墳群  
 12. 下永谷古墳群

1図 妻道南遺跡位置図

持田古墳群との関係で注目されるのは、古墳群から東の丘陵上にある上別府遺跡で、<sup>註3</sup>6世紀代の堅穴住居跡をはじめ二重口縁を有する古式土師が出土している。持田古墳群の造営と直接かかわった人々の遺跡ではないかと注目される。

持田古墳群の立地する台地の南側には弥生時代前期～中期に比定される持田中尾遺跡<sup>註4</sup>があって下城、城ノ越系土器の他、大陸系磨製石器のセットが出土した。土器はこれまで不明な点が多くあった本県の弥生前期から中期頃の土器編年に光明をもたらしている。持田中尾ではそのほかに層序は明らかではないが、円形搔器、三稜尖頭器等の旧石器も出土している。児湯郡の台地一帯はこれまで比較的多くの旧石器が表採されているが、町内でも新山、密雀山地区で確認されている。

註1. 「宮崎県文化財調査報告書」第17集、宮崎県教育委員会、1968.

註2. 「持田古墳群」、宮崎県教育委員会、1969.

註3. 「上別府遺跡」、宮崎県教育委員会、1979.

註4. 「持田中尾遺跡」、高鍋町教育委員会、1982.

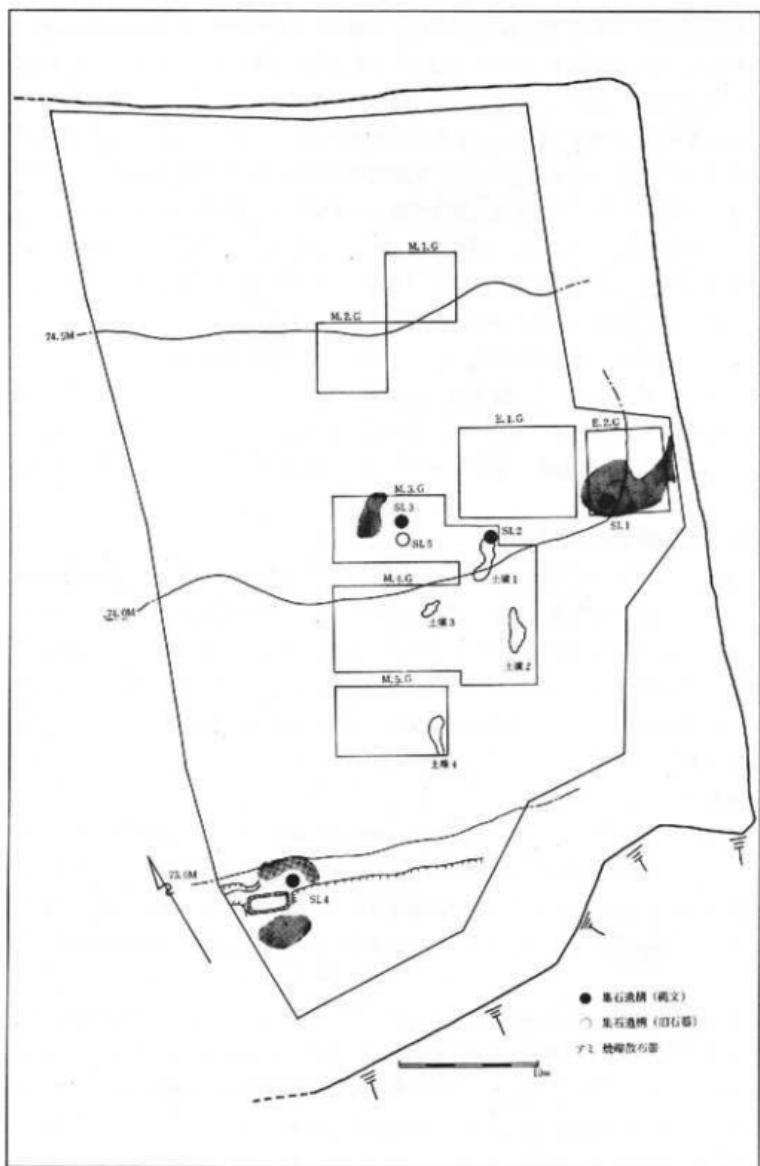
### 3. 発掘調査の概要

調査は、ほ場整備工事着手計画、および作付けされている農作物穫り入れ時期の関係から一ツ瀬改良事務所と協議の上、A地区から先に実施することにした。A地区的発掘に昭和60年10月28日から12月26日までの期間をかけたが、実際にはセクション、土壤等の実測を残したので、B区と並行しながら進め、翌年1月初めまで要した。B区は、12月中に数本のトレンチを入れて遺跡の範囲、上層の確認を行ない、翌年1月18日まで実施した。

#### A区

計画では、1～2日の試掘の後、直ちに耕作土を重機によって全面的に剥ぐ予定であったが、発掘区の大部分が収穫の遅れからいまだカライモ畠となっていたため、計画を変更せざるを得ず、収穫を待つ間畠外域にNトレンチ（2m×4m）、M<sub>1</sub>・M<sub>2</sub>トレンチ（5m×5m）、Sトレンチ（2m×4m）を設定して層序の把握に努めることとした。

A区は、赤ホヤがところによって薄く残っているものの、北端、中央部は耕作土直下がすぐに暗褐色小白斑ローム（黒ニガ）となっており、上層にのるべき、黒ボク、赤ホヤがすで大きく削平されていることを知った。発掘区中央より東側では、すでに昭和59年11月の確認調査段階において、イモ畠中に焼燐の散乱が確認されていて削平が大きいことを示していたが、その部分一帯はすでに黒ニガも失なわれて、耕作土直下



2図 妻道南遺跡A区発掘区・遺構分布図(1/400)

は褐色ロームとなっていた。すなわち、北側は耕作土直下黒ニガ、中央部東端は耕作土直下褐色ローム、南側では耕作土直下赤ホヤ層となる。以上によってこの地区はある時期において、重機等によって大規模に北側から南側におされていることが推定された。

調査では、重機による表土剥ぎを北側では耕作土を剥いで黒ニガ直上でとめ、南端では耕作土・赤ホヤ層を剥いで同じく黒ニガ直上でとめた。褐色ロームが露出している地区では手掘りによる表土剥ぎとした。土層観察は、前述のトレンチの他、遺跡中央附近に設けたE<sub>1</sub>グリッドを約3m掘り下げて行なった。また、土壤分析はこのグリッド北面土層によって観察・採取されている。

その他、黒ニガ下褐色ロームまで下げたグリッドはM<sub>3</sub>、M<sub>4</sub>、M<sub>5</sub>、E<sub>1</sub>、E<sub>2</sub>グリッドである。ただし、前述のようにM<sub>3</sub>グリッドから南、4号集石附近までは耕作土下すでに褐色ロームが露出していた。また、さらに旧石器面まで掘り下げて精査したグリッドは、E<sub>1</sub>、E<sub>2</sub>、M<sub>3</sub>、M<sub>4</sub>グリッドである。なお、M<sub>3</sub>、M<sub>4</sub>グリッドは、後に土手を壊してつなげている。

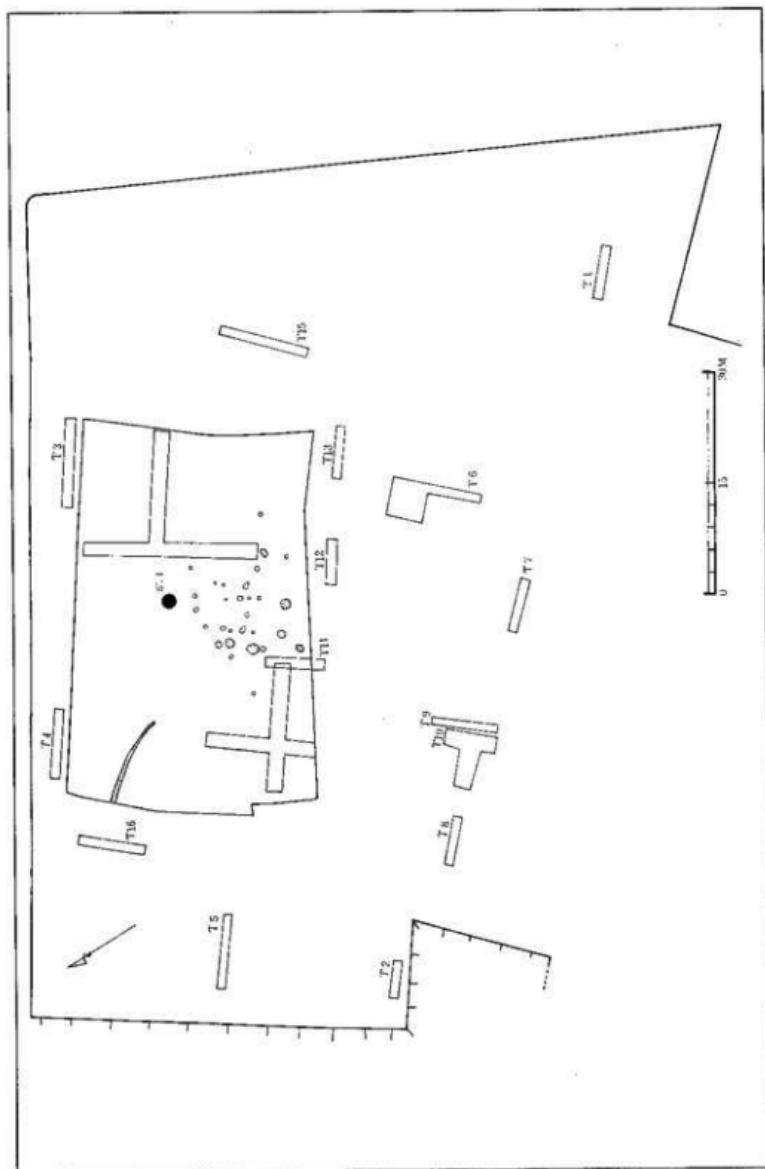
以上の結果、A区で検出した遺構・遺物は次のとおりである。集石遺構5基（縄文早期4基、旧石器時代に相当するもの1基）、土壙4基（縄文早期）、貝殻条痕文土器、石鏃、磨石、旧石器（ナイフ型石器、石核など）。

#### B区

B地区は飼料用の燕麦が作付されていたために、収穫まで待たねばならず、試掘もままならなかったが、土地所有者の理解を得てA区と並行しながら調査区南端、北端、東端にそれぞれT<sub>1</sub>、T<sub>2</sub>、T<sub>3</sub>、T<sub>4</sub>トレンチを設けて層序の確認に努めた。

その結果、南端・東端は赤ホヤが薄く残っているものの本米のオレンジ色を呈しておらず、耕作土との攪乱がすんでおり、かなり削平を受けているものと考えられた。南端は赤ホヤ層まで50cm～70cmの深さがあつて比較的の残存状態が良好であったが、柱穴等の遺構は検出されなかった。12月下旬、燕麦収穫終了後本格的にトレンチ入れを開始し、遺跡の範囲の把握に努めた。T<sub>10</sub>、T<sub>11</sub>で幅80cm、深さ10cmほどの浅い溝状の掘り込みをみた他は、柱穴、その他の遺構をとらえることはできず、遺物も耕作土中に近世の陶磁器小片を中心にして少量の出土にとどまった。T<sub>12</sub>において、褐色ローム中に初めて集石遺構の一部と思われる焼跡をとらえたため、T<sub>14</sub>を中心として30m×50mの範囲で重機によって耕作土を剥いで暗褐色小白斑ローム面を露出させた。その後は、作業員による手掘り作業で、明褐色ローム上面まで掘り下げている。

以上の結果、B区で検出した遺構は次のとおりである。集石遺構1基（縄文早期）、



3図 妻道南遺跡B区発掘区・遺構分布図(1/1200)

溝状遺構、土壤、ピット群、押型文土器、石鐵。

## 4. 層序

### A区

A区の層序は、耕作土（I層）直下が暗褐色小白斑ローム層（III層）となっており、土層が著しく削平されている。削平は中央部から北側にかけてが著しく、特に西端では暗褐色小白斑ロームまでも削平され、その下の褐色土層（IV層）があらわれていた。周辺では赤ホヤ（II層）が薄く残り、南端では良く残っていた。

図4は、A区、E1トレント北面の土層断面図である。IV層は暗褐色小白斑ローム直下の粘質でよくしまった褐色上層で、灰褐色の粘質小ブロックを斑文のように含んでいる。

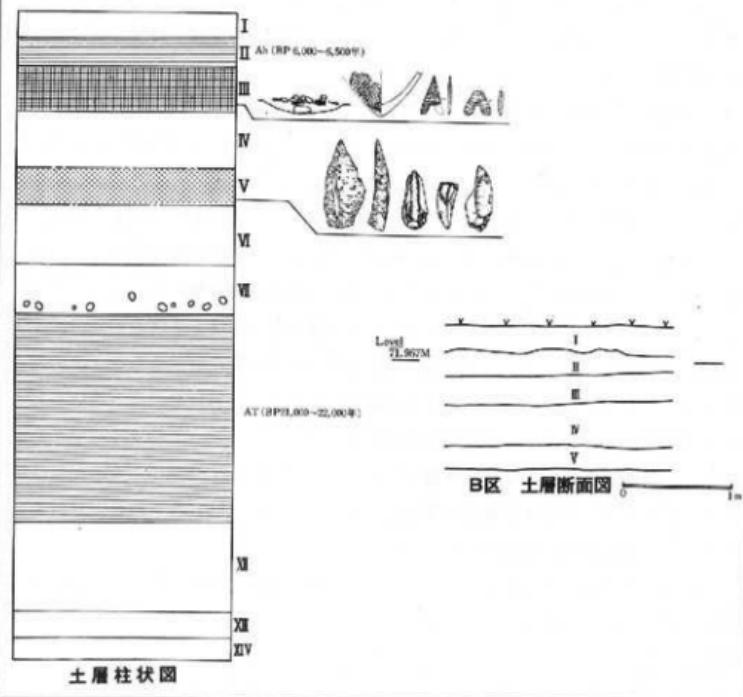
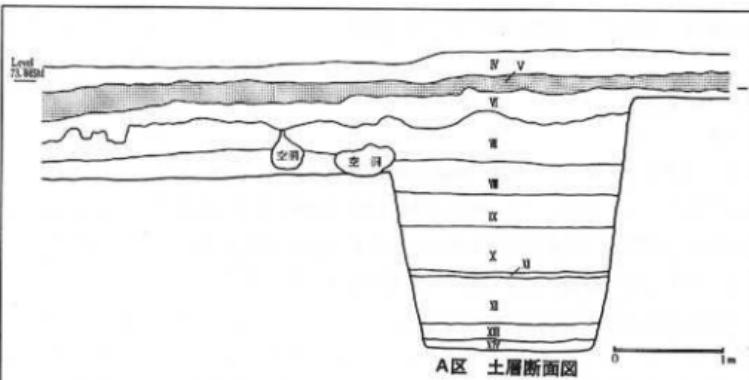
V層は、基本的にはIV層と同様、粘質でよくしまり灰褐色の小ブロックを含むが、IV層・VI層と対比すると全体にボーッとして層界のはっきりしない暗い帯のように見える。これは恐らく、上下層に比較して有機物の混入が多いものと推定される。この層がナイフ形石器をはじめとする旧石器の包含層である。IV層・VI層との層界は極めて不明瞭である。

VI層は粘質でやわらかい明褐色土層で縦に割れ易い。VII層は薄黒褐色砂質土で堅くしまっている。0.5mmほどの石英と0.02~1.0mmの大粒の黄色軽石粒が非常にめだつ。また、直徑3.0~4.0cmの楕円形の薄灰色リング状のものが日につく。このリング状のものの成因は不明である。VIII、IX、Xは第二オレンジ（A T）が風化水積したものである。したがって、軽石の小粒、中粒、大粒がラミナ状に互層となっている。VIII層はオリーブ褐色砂質上で、1.0mm~3.0mm大粒のやわらかい軽石からなり、サラサラしている。IX層は褐色粘土と第二オレンジが互層となってラミナ状を呈し、黄褐色土となる。X層は、サラサラして軽石の粒がそろっており黄色砂土となる。XI層は本来のA T層下層と思われ、明るいオレンジ色をしている。軽石粒はひじょうにやわらかく、指でつぶすと粘質を帯びていることがわかる。以降、VII~X層までは堅くしまっている。XII層は黒褐色を呈する粘質のつよい層で、明褐色をした5.0mm大の小さな斑文が密に散布する。XII層は基本的にXIII層と同じであるが、XIII層でみられた明褐色の斑文がない。XIV層は褐色で粘性の強いまったくの粘土層となる。

以上、A区の土層は水積による第二オレンジの厚い層が特徴的である。III層、およびV層が遺物包含層である。

### B区

B区はAとの比高差が2.9mあり、B区のほうが低い。B区の層序は、どこでもほと



4図 妻道南遺跡土層断面図・土層柱状図

んど水平に堆積している。赤ホヤは残っているが、薄いかあるいは耕作による擾乱がみられる。A区層序との著しい相違は、第二オレンジが全くみられないことで、ここではA区にみられない小丸疊混りの堅い赤橙色土がある。

I層は黒褐色のさらさらして、やわらかい耕作土である。耕作によるとと思われる赤ホヤの小ブロックを含んでいる。II層は赤ホヤ層となる。擾乱が多く純粋な降下赤ホヤ層ではない。III層はいわゆるクロニガと通称されるもので、乾燥すると縦横にヒビ割れして堅くなる暗褐色土壤である。小白斑の小粒を多く含んでいる。IV層は1.0mmほどの小石を含む粘質の明褐色土である。V層はひょうに堅くしまって、1.0~10mmの小石、軽石を多く含む赤橙色の疊土である。下層にゆくにしたがい疊が大きくなる。

## 第2章 遺構と遺物

### A区

#### 1. 遺構

##### (1) 集石遺構 (SI)

A区では5基の集石遺構を検出している。4基は第III層の暗褐色小白斑ロームに営まれたもので縄文早期に、1基は第V層褐色ロームに営まれ旧石器時代に相当するものである。縄文時代早期に比定される4基のうち3基(SI.3~SI.3)は発掘区中央部、標高74.0m付近に東西方向約7~8m間隔で並ぶ。SI.4は一基だけ離れてSI.3から南に約25m、標高差約1m下方の地点に位置する。旧石器時代に比定されるSI.5は層位的にはSI.3から約25cm下の層、平面的にみればSI.3から南に約1.2m離れて位置している。

##### SI.1

SI.1は発掘区の中央東端に位置し、直径約90cmのほぼ円形に極浅い掘り込みをもって集石し、南東に約4.5度傾斜している。構成疊は10×10×9cmほどの拳大の角疊25個、5×5×6cmほどを中心としてより小さな小角疊100個、合計125個よりなりすべて加熱されているとみて薄赤色又は灰白色化している。角疊がほとんどであるが、半壊丸疊数個を含む。

集石は、小白斑(長石)を含んだ堅くしまった暗褐色小白斑ロームを埋土とし、褐色土中に6~7cmほど浅く掘り込まれている。集石埋土中に上器片、炭化物等の遺物は検出されない。周辺には東西7m南北4mの範囲に焼疊の散布がみられる。

#### SI.2

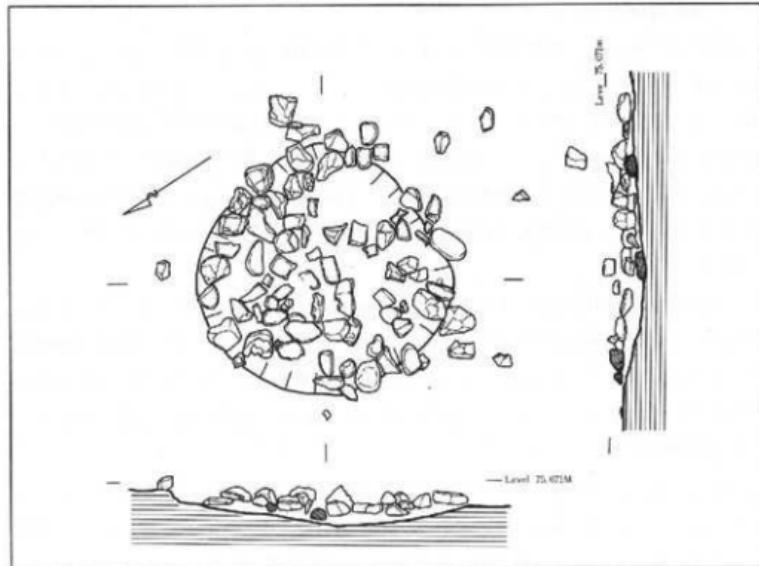
SI.2はSI.1から東約9mに位置する。SI.2は南北方向南に約6度傾斜して、長軸80cm、短軸75cmのほぼ円形に広がり、深さ13cmをもって明褐色土中に掘り込まれている。礫は赤化、あるいは灰白色化している。20×12×8cmの大角礫を含むが、平均すると拳大の角礫で構成され、丸礫はない。埋土は暗褐色小白斑ロームで、炭化粒を比較的多く含んでいる。

#### SI.3

SI.3はSI.2の西南西7mに位置し、深さ約10cmの浅い略円形プランを有し、明褐色土中に掘り込まれている。長軸65cm、短軸50cmに集石する小集石遺構であり、南に約2.5度傾斜している。埋土は暗褐色小白斑ロームで、炭化粒が混じる。礫は概して灰白色化した小角礫、その破片で構成され、中央に15×10×6cmの丸礫を敷いている。

#### SI.4

発掘区の南端、最も標高の低い地点に位置して他の4基から離れて孤立している。焼礫は東西辺1.5m、南北辺1.0mの長方形形状に集石することから、掘り込みの形状も長方形状かと思われたが、プラン検出のため焼礫を排除すると長軸(東西)1.5m、短軸(南北)1.3m、深さ30cmのほぼ円形のプランであった。構成礫は拳大から、よりひ

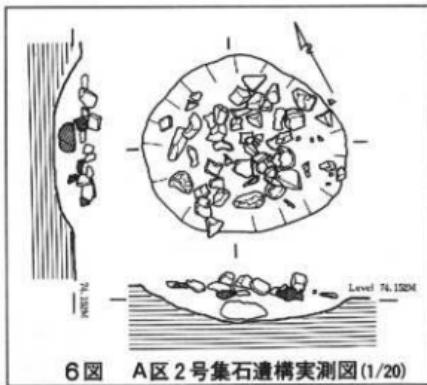


5図 A区 1号集石遺構実測図(1/20)

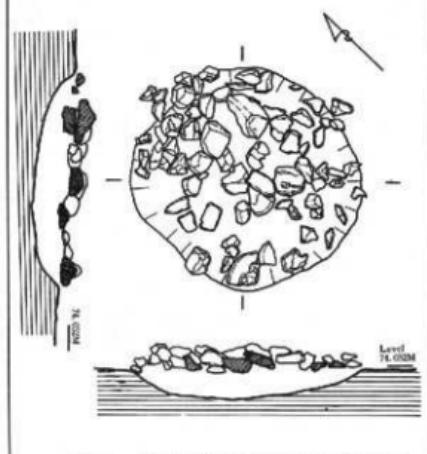
とまわり大きな角礫、丸礫、総計934個の焼礫からなる。円形プラン中央に扁平な大丸礫(22×23cm)を囲んで数個の扁平礫が敷かれている。いずれも強い熱を受けたとみえて赤褐色化している。

円形プランは南に約7.5度傾斜して、下層の褐色土中に掘り込まれ、プラン北端と南端とでは18cmの標高差をもっている。プラン埋土は基本的には暗褐色小白斑ロームであるが、やや黒味を帯びている。埋土中に多量の炭化粒が混ざり、指頭大の炭化物もみられた。炭化粒は埋土中にとどまらず、プラン外周約30~50cmの範囲で褐色ローム中に散見される。

このSI.4で特徴的なことは、集石周辺を小破碎礫がとりまくことで、特に北半分の破碎礫は、集石との間に若干の間隔(30~50cm)をもって集石中心から半径170cmの半円形に散石する。集石から南下方には1.2×3.0m、深さ12cmの耕作土を埋土とする長方形の新しい掘りこみがあるが、これよりさ

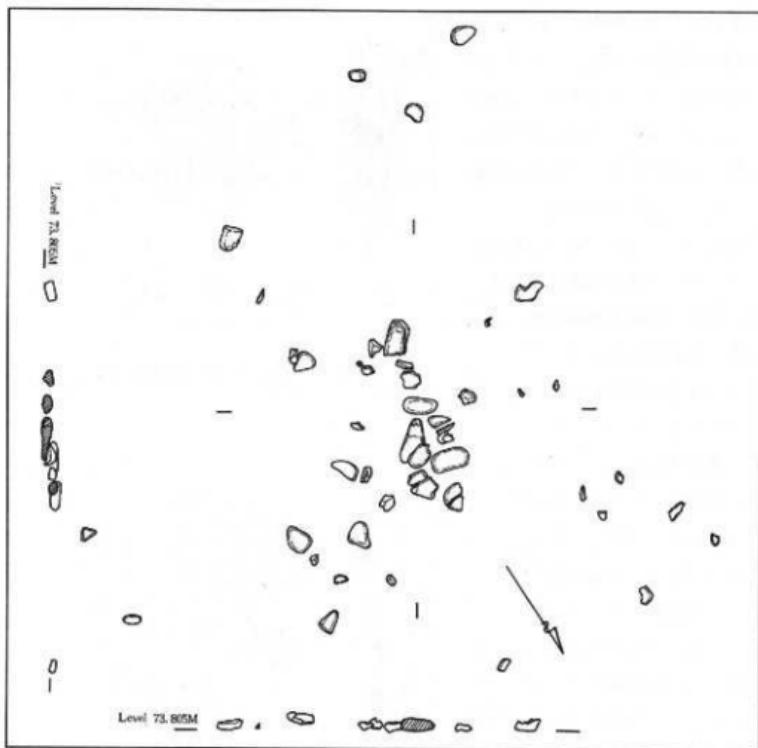


6図 A区2号集石遺構実測図(1/20)



7図 A区3号集石遺構実測図(1/20)

らに下方にも南北2.5×東西5.0mの範囲で孤状に焼礫の散石がみられる。北半分よりもやや散漫であるけれども、これ等もSI.4の廃棄礫の可能性がある。



8図 A区 5号集石遺構実測図(1/20)

### SI.5

SI.5はM 3 グリッドで検出している。層位的にはSI.1～SI.4の営まれた暗褐色小白斑ロームから約25cm下の灰褐色の小ブロックを含む暗褐色ローム面で検出している。この面はナイフ形石器を検出した面でもある。SI.5は上層の4基の集石のように密な集石になっていない。円形や略円形のプランも持たず130×100cmの範囲で、北東に長軸をとって広がる。礫は大きなものでも13×7×4cm位のもので概して扁平なものが多く、赤褐色化している。

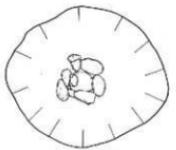


図 4 集石平面図

9図 A区 4号集石実測図(1/40)

## (2) 土壌

土壌は発掘区の中央附近、M 4 グリッドを中心に 4 基検出している。いずれも集石遺構が営まれた面、すなわち暗褐色小白斑ローム上での確認は困難であり、小白斑ロームを剥ぎとった面である褐色ローム上に掘り込まれた状態で検出している。埋土は基本的には暗褐色小白斑ロームと思われるが、全くの同質ではなく小白斑を多く含むものの、やや薄い暗褐色を呈する。ただ土壌 4 だけは黒ニガと同質に近い。土壌床面は 4 基とも暗褐の砂質土となる。4 基のうち 3 基は長軸をほぼ南北にとる。すなわちコンタラインに直行する長楕円形となる。最も北に位置する土壌 1 と最も南に位置する土壌 4 との比高差は約 30cm である。

### 土壌1.

土壌 1 は長軸 2.9m、最大幅 1.0m を測り、楕円形の土壌が二基連結して弓形に屈曲する。連結部も浅く掘り込まれている。上部の楕円土壌は床面の北西端に浅い掘り込みがあって全体には断面 U 字形に掘り込まれている。埋土中に角礫数個を見る。

### 土壌2.

土壌 2 は主軸を北北東方向にもって長さ 3.18m、最大幅 1.11m の不定形に掘り込まれ、上端と下端にプラットホームをもつ。床面は概してフラットとなって凹凸が少ない。上端の段部において角礫を一個検出した。角礫は赤変はみられないが、焼け礫の可能性が高い。

### 土壌3.

土壌 3 は主軸が東西方向にあって長さ 1.3m、最大幅 0.55m の不定形に掘り込まれ、壁面、床面ともに凹凸がある。壁面が掘り込み面より奥にえぐられたように掘られているところもある。上面に拳大の角礫と小角礫を検出している。

### 土壌4.

土壌 4 は主軸を南北方向にもち長さ 2.73m、最大幅 0.75m の長円形を呈し、断面略 U 字形に掘り込まれ、最深部 38cm で北に深く、南に浅く掘り込まれている。埋土中に礫、炭化粒などを全く含まない。

## 2. 遺物

### (1) 縄文時代の遺物

#### ① 石器

第12図の石器は縄文時代の石器である。6の打製石斧は耕作土中からの出土、4.5はA区E1、E2グリッド南の大きく削平され、しかも耕作によって攪乱された地点からの出土であり、層位的には不明である。

以上のはすべて集石遺構面と同じ層である褐色小白斑ローム中から検出されている。

#### 敲石（12図. 1）

全長12.0cm、幅8.1cm、厚さ4.3cmを計測する細長い半折丸礫を使用した中粒砂岩製の敲石である。底面に潰痕がみられ、打撃痕とおもわれる。強い熱を受けているとおもわれ、赤化が著しい。

#### 磨石（12図. 2）

細粒砂岩製の小さな磨石で、半壊している。肉眼でみたかぎり熱を受けた形跡はない。

#### 石核（12図. 4.5）

4は半円礫の片面側から連続的にほどこされた剥離面をもつ横長剝片用の石核である。チョッパーに似るが刃部をつくりだしていない。

5は器面の側面、底面に滑らかで不自然な曲面を観察する石核である。この磨かれたように滑らかな面は、おそらくローリングを受けてエッジが磨耗したもので、ローリングを受ける以前において、二次的加工を施されていたものと推定される。側縁に縦長の大きな剝片を剥ぎとったあとを残している。

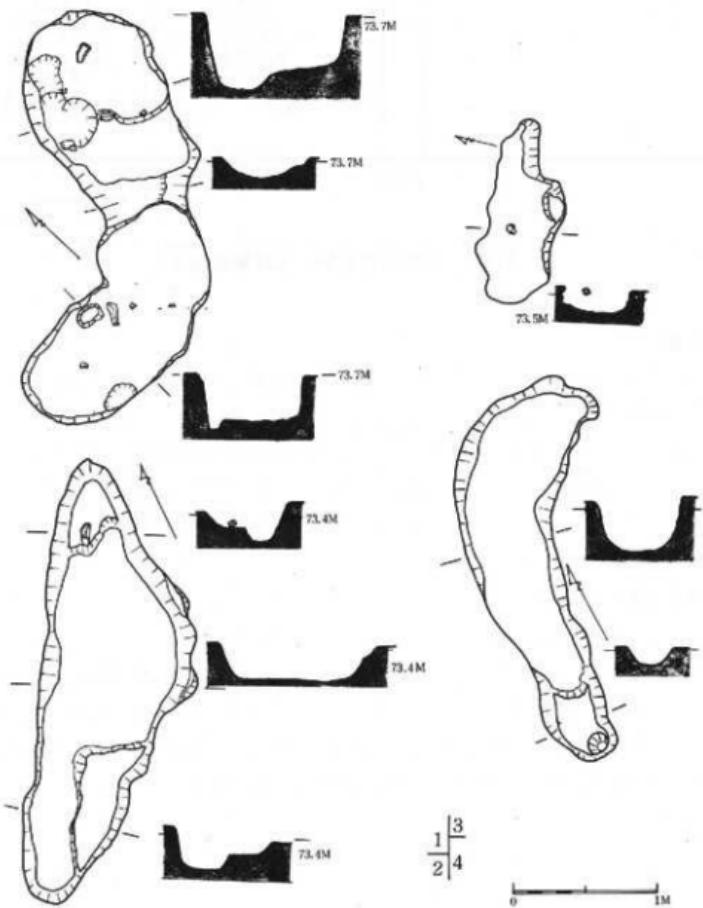
#### 打製石斧（12図. 6）

全長10.8cm、幅6.2cm、厚さ1.9cmを計測する小型の打製石斧である。刃部は磨耗して、表面も薄く剝がれている。

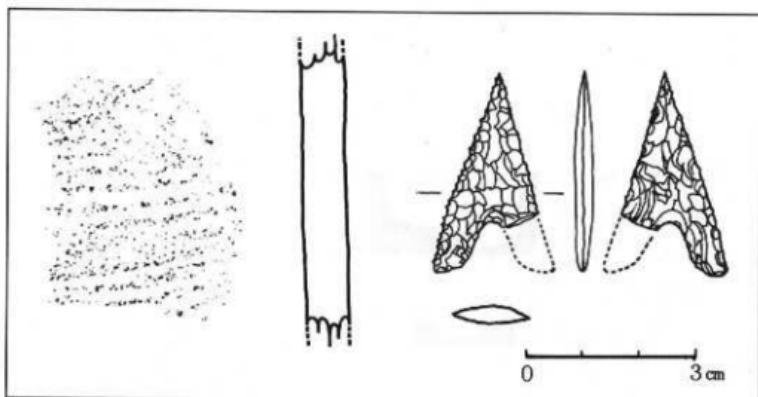
石質は粘板岩質である。

#### 剝片（12図. 3）

片面に原面を残す、円形の剝片である。周縁部に、使用痕と思われる歯こぼれを見る。



10図 A区土壤実測図 (1/40)



11図 A区出土石鎌・土器実測図(1/1)

#### 石鎌 (11図)

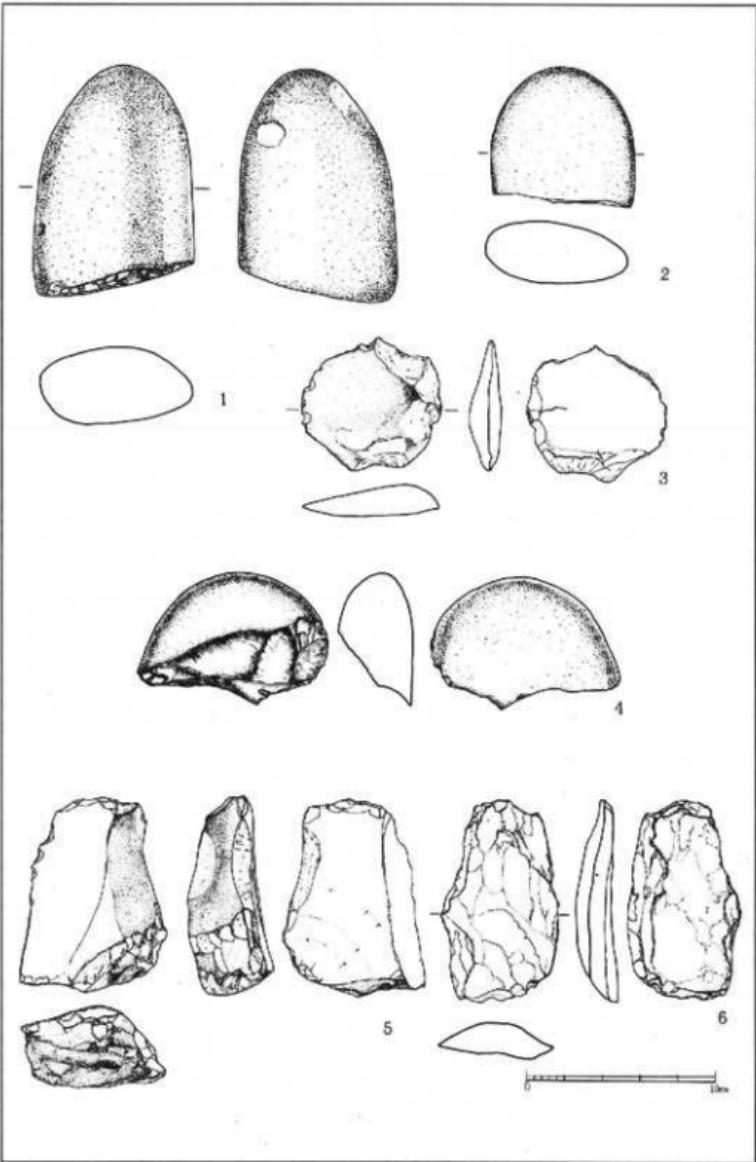
3. 全長が幅の1.5倍ある細長い二等辺三角形状をしたチャート製の打製石鎌である。基部は大きくえぐられて、双脚となる。

両面から調整加工を施しているが、一方からの調整がより細かく丁寧である。全長3.5cm、推定幅2.1cm、厚さ0.3cmを計測する。

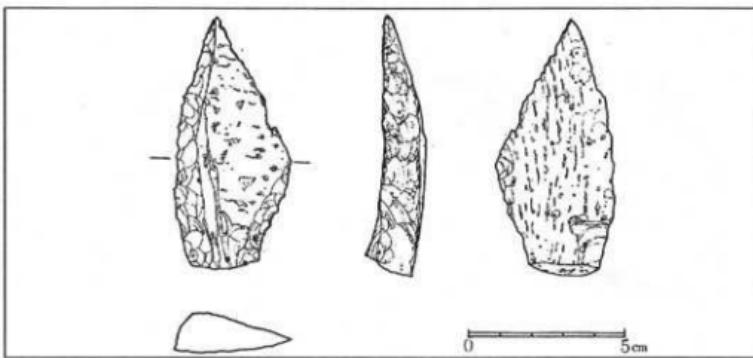
#### ④ 土器

##### 貝殻条痕文土器 (11図)

A区より出土した土器は一点のみである。出土地点はSI 3から北約6.5mで、暗褐色小白斑ローム土中より出土している。5×4cm、器厚0.8cmを測る貝殻条痕文土器片で、風化が著しく条痕は消えかけている。下方一部に条痕の施されてない部分がある。表面赤褐色、裏面黒褐色を呈し、裏面の調整はタテ方向のヘラミガキである。胎土に大量の0.5~1.0mmの長石、石英、角閃石を含んでいる。



12図 A区出土石器実測図(1/3)



13図 A区出土 ナイフ形石器実測図 (2/3)

## (2) 旧石器

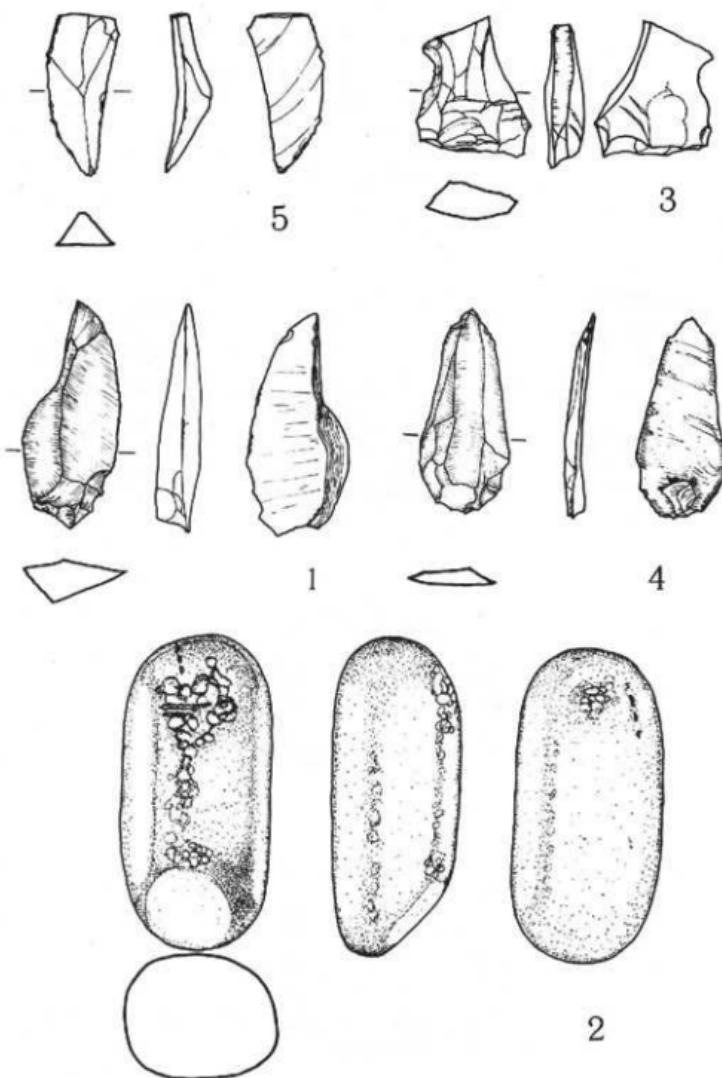
### ナイフ形石器 (13図)

器長8.0cm、器幅3.7cm、器厚1.2cm。大形で厚味のある縦長剥片を素材として、二側縁に加工をほどこした大形のナイフ形石器である。断面直角三角形状を呈し、基部は一部欠損している。左側の一側縁の全部と刃部側の基部側縁に主要剝離面からの刃潰し加工が丹念に施されている。左側の全側縁の加工は、素材が極厚にもかかわらず、主要剝離面一方だけから行なわれていることが特徴である。石質は気泡を多く含む黒曜石製である。劣化が進んでいるものと思われややもろい。

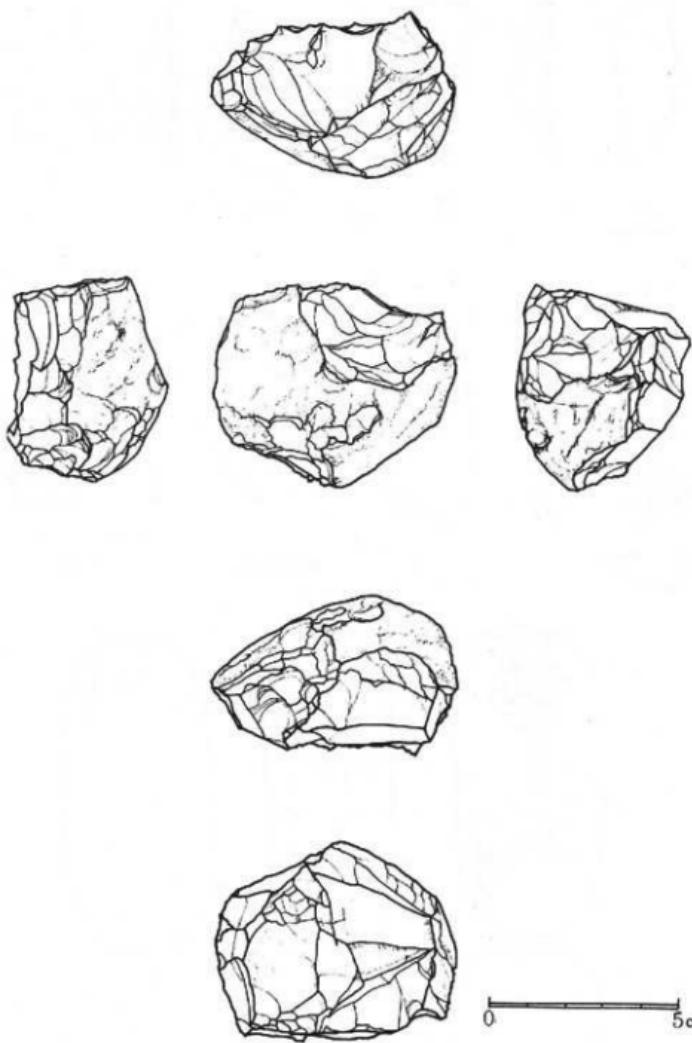
14図1は、器長6.0cm、器幅2.6cm、器厚1.1cm。横長剥片素材そのものを最大限に利用し、加工を最小限にとどめている。基部両側縁に主要剝離面から調整が施されている。刃部は片側縁の $\frac{1}{3}$ 以上を占めて、文字どうりのナイフ形を呈し、小さな使用痕を観察する。無斑晶流紋岩製である。

### ハンマー (14図. 2)

器長8.3cm、器幅3.9cm、器厚3.3cm。縦長の丸蹠を利用した石器製作時の工具である。丸蹠表面上部を中心に潰痕がある。打撃痕は上下方向に敲打したと思われる円形のものと、横方向に走る二条線をみる。裏面にも同じく上部に小さな打撃痕を観察する。



14図 A区出土旧石器実測図 1.(2/3)



15図 A区出土旧石器実測図 2. (2/3)

### 二次加工のある剥片（14図3,4）

3. 一側縁部の小さな湾曲した部分に主要剥離面からの二次加工調整剥離を観察する剥片である。

恐らくナイフ形石器か尖頭器の製作途中に上部が折損したために廃棄された剥片であろう。石質は無斑晶流紋岩である。

4. 薄い縦長剥片を素材とし、先端の極一部両側縁を主要剥離面から調整して、錐様を呈しているが、最先端は折損している。両側縁は刃として使用可能である。断面台形状を呈し、基部の主要剥離面に明確な打瘤痕をみる。石質無斑晶流紋岩製。

### 使用痕のある剥片（14図5）

縦長剥片を素材とし、両側縁とも刃部として使用した形跡があり、使用痕とみられる刃こぼれをみる。断面正三角形状を呈し、一稜をもっている。

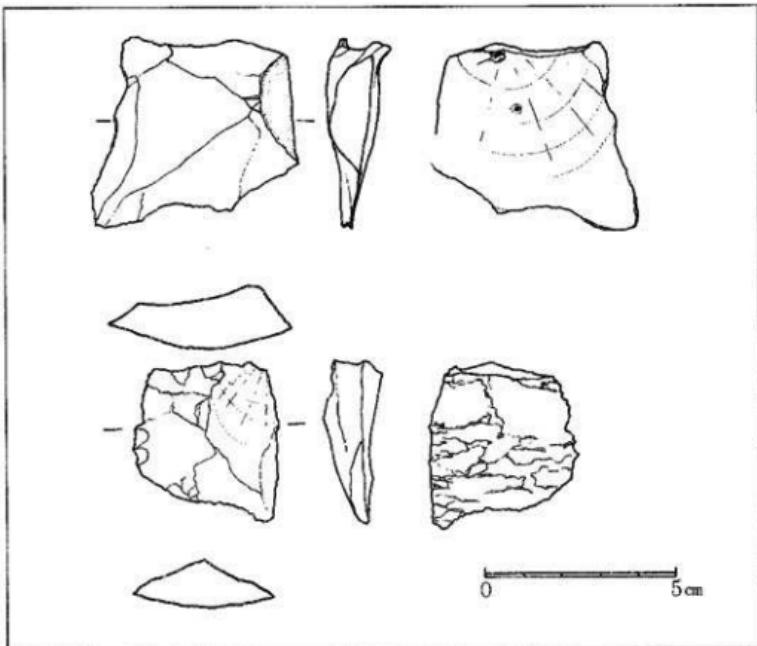
石質無斑晶流紋岩。

### 剥片（16図1,2）

二点とも砂岩製の不定形剥片で、二次加工はみられない。1.は主要剥離面に打瘤痕を残しその下部に小さな丸い凹みをみるが、二次的なものかどうか明確でない。縁部は風化して丸味をおびている。

### 石核（15図）

打面をつぎつぎに変えながら小さな剥片を剥いでいった形跡が残る幼児の拳大の石核である。剥ぎとられた剥片は不定形の小さな剥片が主なもので、自然面を残している。



16図 A区出土旧石器実測図 3.(2/3)

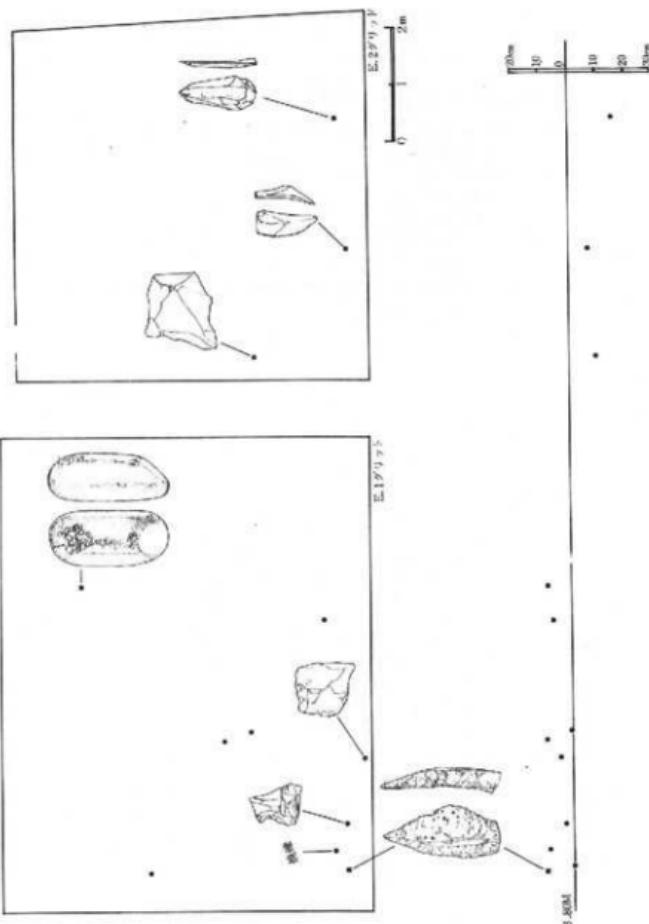
## B区

### 1. 遺構

#### (1) 集石遺構

##### SI.1

SI.1は直徑約160cmのほぼ円形に広がる。掘り込みはなく、暗褐色小白斑ローム上に平面的に集石している。礫自体は偏平なものが多く、丸礫そのままの形を残しているものはない。ほとんどが赤化して、かなり強い熱を受けたことを示している。13×10×5cm位の破礫を最大として、大小121個からなっている。中心部約4cm下で褐色ロームとなる。集石下の暗褐色小白斑ローム中に炭化物などを含まない。



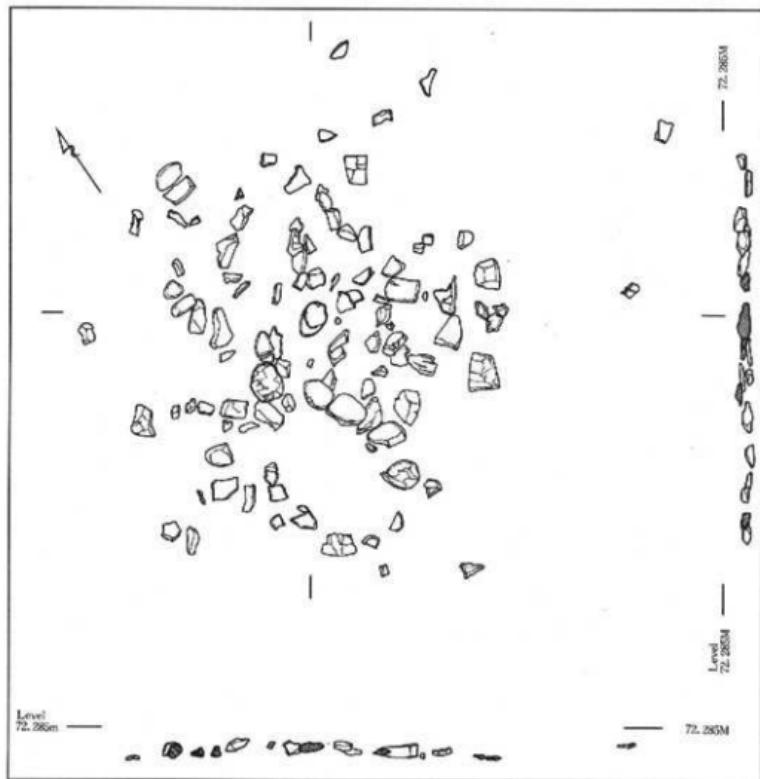
17図 A区旧石器分布図 (1/100)

## (2) その他の遺構

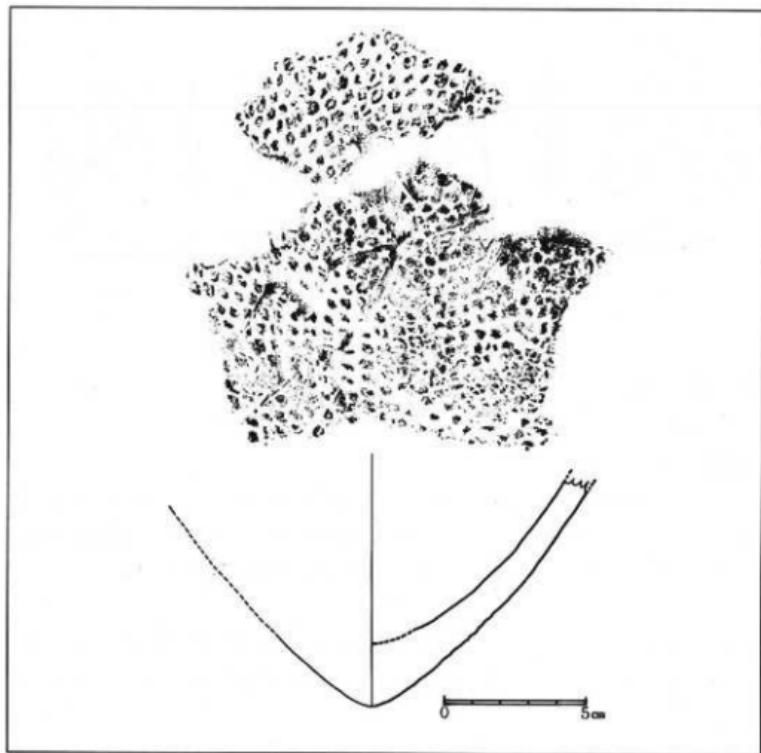
集石遺構の他に、ピット群と溝状遺構がある。ピット群は赤ホヤのブロックを含む現耕作土にちかいサラサラした黒褐色土壤を埋土としている。

ピット中から遺物の出土ではなく、掘立柱建物等の遺構は検出していない。溝状遺構は南から北北西に最大幅81cm、長さ12mにわたって伸び、途中で止絶えている。暗褐色小白斑ロームとその下層の褐色ローム上部まで掘り込まれている。

上端である小白斑ロームから溝底である褐色ロームまでの深さは、2.0~9.0cmを測る浅いもので、上部は削平されているものと思われる。

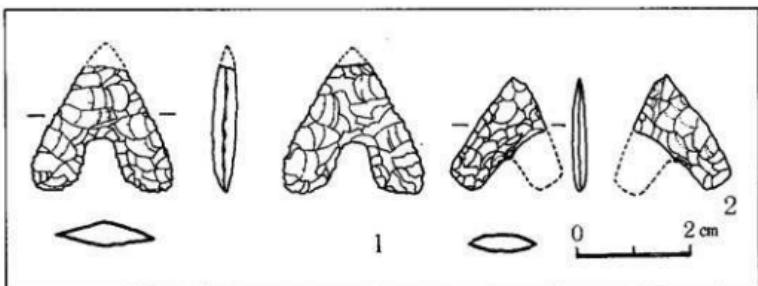


18図 B区1号集石遺構実測図(1/20)



19図 精円押型文土器実測図(1/2)

南端から北西端までの溝底高低差は24.8cmで、やや黒味をおびたサラサラした黒褐色土が埋土となる。部分的に埋土は赤ホヤブロックを含み、上層の耕作土とはやや色調を異にする。



20図 B区 出土石器実測図(1/1)

## 2. 遺 物

### (1) 石器

#### 石器 (20図. 1, 2)

1. 乳白色半透明チャート製の比較的厚みのある打製石器である。基部は大きく逆「U」字形にえぐられて双脚となり、両側縁は曲線となる。いわゆる、鎌形器の範疇に入れるべきものである。推定全長2.6cm、幅2.5cm、厚さ0.43cmを計測する。

2. 透明度が高く硬質感のある黒曜石製石器である。茶褐色を呈する。片方の脚部を欠く。脚は角ばっており四角形を呈している。全長2.0cm、幅2.0cm、厚さ0.3mmを計測する。

### (2) 繩文土器

楕円押單文土器尖底部は、SI.1から西に、24m離れた地点から尖底部を下にした形で検出している。周辺から遺物・遺構は検出されていない。器形はゆるくカーブを描きながら尖底となる壺形土器である。口縁部片の出土はない。楕円押型文は、尖底極一部（指先ほど）を除いて粒の小さな楕円文が密に施されている。内面調整はあらいナデ調整、一部板状のものでナデたような横方向の擦痕をみる。表面暗赤褐色(Hve 2.5YR3/6)、内面暗赤褐色(Hve 2.5YR3/4)を呈する。

### (3) 須恵器

甕、あるいは壺と考えられる須恵器片である。T10トレンチ耕作土中より出土した。表面は褐灰色で(Hve 10YR5/1)平行線文タタキ、裏面は丁寧にナデ調整され円心円

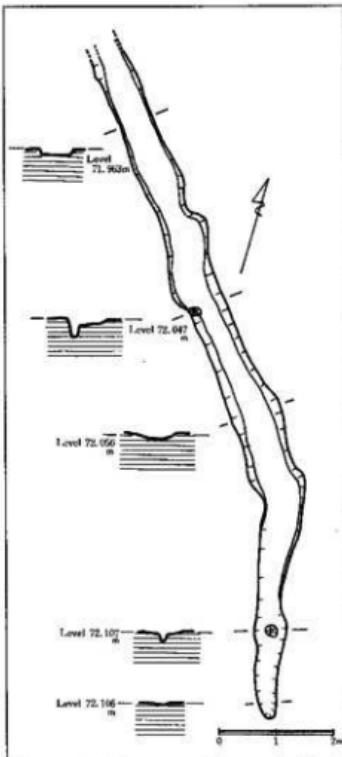
文がうすく残って黄褐色（Hve10 YR 4/2）を呈する。歴史時代のものである。

#### (4) 陶磁器 (22図)

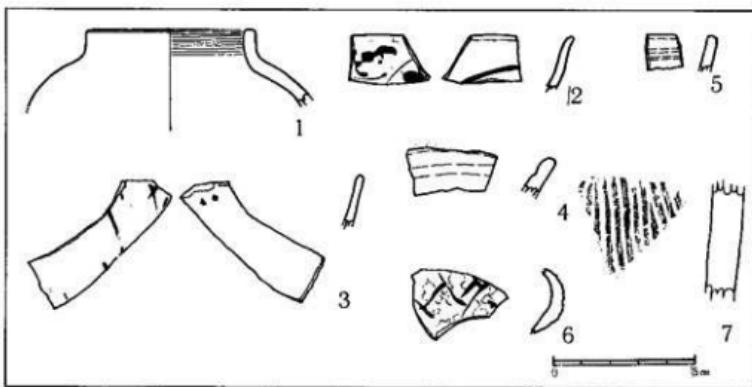
陶磁器片は各トレンチで出土しているが、細片ばかりで実測できたものは限られている。細片のため実測図で示すことのできなかったものの中には次のようなものがある。白化粧のあと銅緑釉がかかる18世紀から幕末に比定される唐津の大皿片、18世紀以後の関西系陶器片、18世紀肥前の青磁染付碗蓋片・青磁袋物片、12世紀から14世紀ころの輸入青磁体部小片、以上その他、型物の素焼人形片がある。

なお、染付碗のなかには、本県小峰窯産のものが含まれている可能性が指摘されている。

1. 推定II径5.2cm、器厚0.4cmを測る小壺の口縁部である。口縁は外反せずほとんど垂直に立ちあがる。口唇部には耐火土を塗り、口縁内側1.0cmほどは鉄泥を塗る。釉は口縁部付近で暗褐色に発色し、口縁以下はほとんど黒褐色に近い黒褐色に発色している。内側でも同様に黒褐色の釉がかかっている。貫入は全くみられない。胎土は赤褐色を呈し、長石の小粒を含む。産地不明である。18世紀以後のものとなろう。
2. 口縁端がわりと急に外反する肥前系の皿と思われる口縁部片である。外面に一条の界線があるが、口縁と平行しないことから何らかの紋様の一部とみられる。内面には唐草文が織細に描かれ青灰色～暗青色に発色している。唐草文は青灰白色を呈し、貫入を全くみない。18世紀の前半から中頃のものである。
3. 薄青灰色の網目文が描かれた肥前の碗である。内側、口縁近くに4条の界線をみる。口縁は外反せずそのまま立ち上がるタイプである。釉は灰色の強い青灰白色を呈し、貫入を全くみない。19世紀前半から幕末のものである。



21図 B区溝状造構実測図 (1/100)



22図 陶磁器実測図(1/2)

4. 青磁模花皿の口縁部である。口縁近く内側に幅4mmほどの沈線が巡る。釉は灰味の強いくすんだ緑灰色に発色し、比較的厚くかかっている。全体に貫入がみられる。胎土は灰色、長石微粒を多く含んでいる。15世紀から16世紀前半に比定できる。
5. 18世紀にあてられる肥前の陶胎染付口縁部小片である。二条の界線をみる。
6. 水滴かと推定される18世紀の肥前系ものである。白色のゴツゴツした器面に茶色の色絵（上繪付）で、網目文が描かれている。
7. 備前のすり鉢片である。内面に11条の凹線をみる。外面ヨコナデ調整で、暗赤褐(Hue 5 YR 3/4)を呈する。胎土に大粒で大量の長石・砂粒を含む。

### 第3章 まとめ

妻道南遺跡では、旧石器時代、縄文時代を主とする2つの文化層がある。

児湯郡内の台地からは、過去県内の他地域にくらべ比較的多くの旧石器が知られていたが、本格的な発掘調査によるものではなかったために層位や石器組成について不明な点が多く、隔靴搔痒の感があった。最近では、宮崎学園都市遺跡群内堂地西遺跡<sup>註1</sup>、延岡市舞野町赤木遺跡<sup>註2</sup>、東諸県郡都野尻町高山遺跡と途々に発掘例が増えつつあるが、各遺跡相互の層位的検討など、今後に託せられた課題も多い。このようななかで、本遺跡の発掘は旧石器時代の層位的発掘の類例の1つとして価値あるものとなった。出土した旧石器のなかで、定型的なものとしては黒曜石製のナイフ形石器がある。器長8.0cm、幅3.7cmという計測値はナイフ形石器としては最大級のものであり希少なものといえる。また、石材の黒曜石は、小さな気泡を含むやや低質なもので、鹿児島県出水市周辺産かと考えられる。この出水産の黒曜石を使用した旧石器を出土した例は、宮崎郡佐土原町船野遺跡<sup>註4</sup>がある。晩期旧石器時代に編年される船野遺跡に先行する時期に、すでに同地産の石材が使用されていたことは旧石器時代の交易を考えるうえで興味ぶかい。出水産の黒曜石といえば、同じ高鍋町内持田中尾遺跡出土の円形搔器がある。持田中尾では他に頁岩製の三稜尖頭器があるが、残念ながら層位的に得られたものではないため、層位・共伴関係が語れないのは惜しまれる。

本遺跡の場合、発掘区域が小範囲であるために、石器の組成等遺跡の性格などを充分に語り得ないが、山土比率からして、ナイフ形石器主体の石器群といってよさそうである。ナイフ形石器の一つに不定形ではあるが、横長剝片を利用したものが含まれていたこと、また、器面に明確な打撃痕を残す工具と思われる敲打器が、ナイフ形石器と同面で層位的にとらえられたことも注目される。本県は鍵層となる第一オレンジ(B.P6,000—B.P6,500)、第二オレンジ(B.P21,000—B.P22,000)の層位がしっかりとしているといえ、遺跡によって両火山灰層にはさまる上層には、植生、地形的要因と思われる微妙な相違があって一様に対比出来るものではないが、本遺跡の旧石器出土層を層位的にみると、黒ニガより下層、またAT、AT風化上層より上層の暗褐色ローム層ということから大まかに後期旧石器時代に編年されよう。

縄文早期の集石遺構を検出した遺跡は最近特に増加しつつある。洪積台地の縁辺部

で、近辺に水の得られる谷をもつ所は主要な立地点である。当遺跡周辺だけでも、水谷原、毛作地区等において黒ニガにはまつたり、畑中に散乱する焼礫をみており、かなりの密度で集石遺構をもった遺跡の存在が予想される。本遺跡の場合、A区のそれは、台地南面の緩斜面に位置し、円形の掘り込みを有する典型的なもので、貝殻条痕文土器を伴なっていた。B区の集石遺構は、台地谷部からある程度距離をおいた平坦地にあって、掘り込みを持たず、平面的に散石するタイプのもので押型文土器を伴なっていた。掘り込みを有するもの、持たないものの関連については、同遺跡内に二つのタイプがみられることが多く、それが時期的なものか機能的なものか早計に判断しがたい。ただ、本遺跡の場合もそうであるように旧石器時代に營まれた集石遺構については、ほとんど掘り込みを持たず、小規模に集石するという例は多い。土器については、A区貝殻条痕文土器片一点、B区楕円押型文土器一点と極端に少なく、互いの共伴関係も明らかではない。集石遺構を有する遺跡では両種の土器が共伴することが多く、例えば新富町瀬戸戸門遺跡では、<sup>註5</sup>掘り込みのある集石遺構18基、ないもの7基の合計25基にともなって、貝殻条痕文土器（前平系）と押型文（楕円文・山形文・格子文）が共伴していた。しかし、野尻町新村遺跡のように押型文単独出土の遺跡もあってこれも一概には論じ得ない。

妻道南遺跡の集石遺構は、機能面について新知見を加えることは出来ないが、次の2つのことがいえる。ひとつは同じ等高線上にグループ性をもって分布する傾向にあること、もうひとつは明確な廃棄礫を周辺にもつ集石（SI4）を検出し、廃棄パターンを想起できることである。

耕作土からは、須恵器1点、土師器1点、陶磁器31点が出土しているが、当発掘区が赤ホヤ以上大きく削平されているとはいえ、調査面積からすれば極めて少量といわねばならず、しかも細片が多かった。これは周辺の削平が少ない地域を表探してもそのようであり、現在でもそうなのだが、水の便が悪く農作物が限られるこの台地の自然環境において、弥生時代以後、人間の営みが極めて希薄であったことを示している。

註1 「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集」 宮崎県教育委員会 1985

註2 60年度調査。

註3 60年度調査。

註4 橋 昌信氏の御教示による。

註5 59年度調査、61年3月報告書刊行予定、遺跡の詳細は日高孝治氏の御教示による。

註6 60年度調査。遺跡の詳細については日高孝治氏の御教示による。



A区 発掘区近景(北→南)



集石遺構(SI.1 SI.2 SI.3)(西→東)

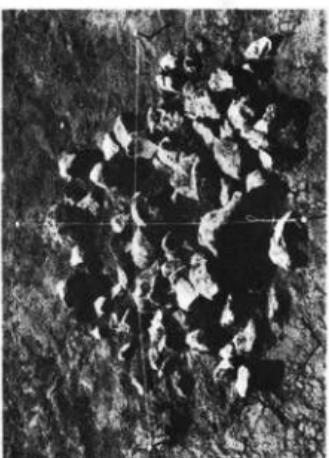
図版  
2

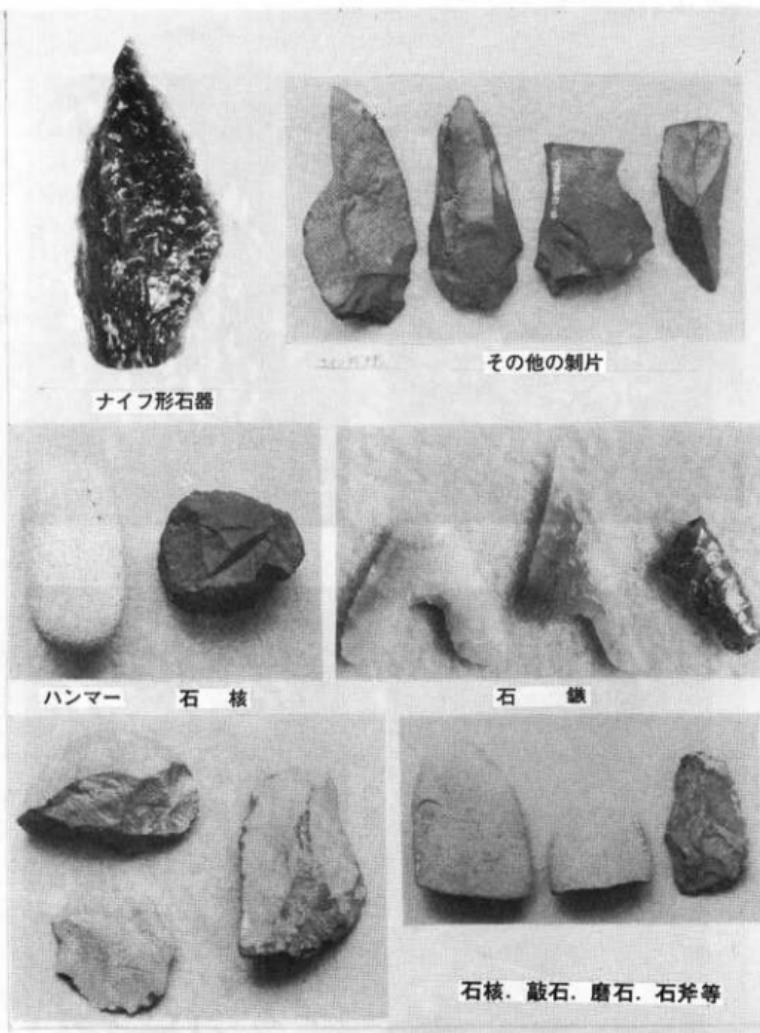


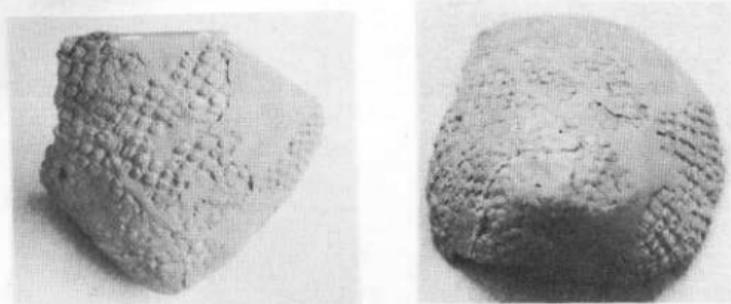
SI.4



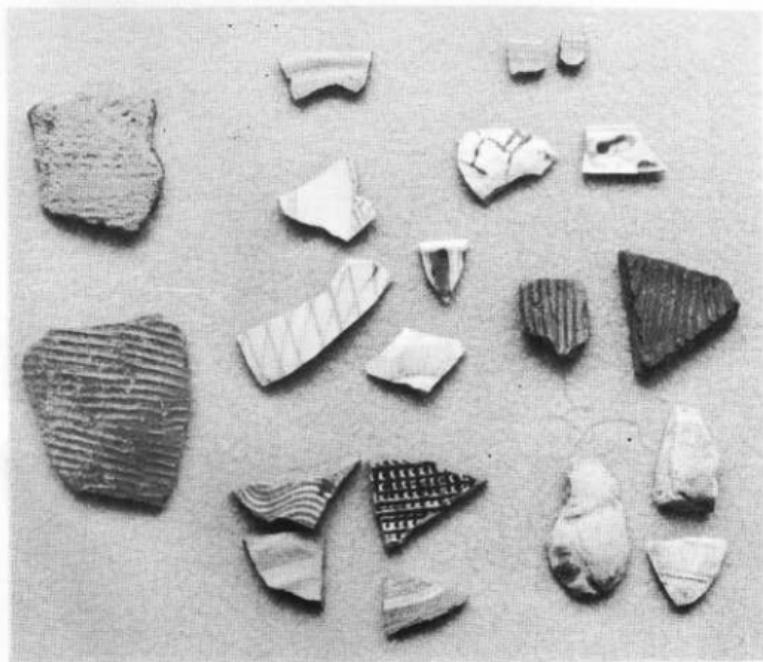
土壤 1







桔円押型文土器



貝殼条痕文土器  
須恵器

陶磁器

